

新刊紹介

上田博・瀧本和成編

『明治文芸館』IV—20世紀初頭の

文学「明星」創刊とその時代—

田邊 匡

(本学非常勤講師)

本書の特色の一つは、「明治文学」ではなく「明治文芸館」と銘うったところに示されているように思われる。

つまり十九世紀と二十世紀にまたがる時代社会を一つの「明治空間」として把握し、あくまでも日本人であることを捨てず、「和魂洋才」をモットーに近代国家を築いていく中で、文学と社会的現象、出版動向等をテーマに「論叢」「研究ノート」は無論のこと、「作家と作品」「資料篇」「資料館案内」更には活動写真館、建築、演劇界までも網羅した「明治の森」と多岐にわたり、全体として「文芸館」を散策するような構成になっているあたりは、従来のいわゆる明治文学史とはひ

と味違った贅沢な趣さえ漂う内容となっている。

特色の二点目は、二十名を越える執筆者のほとんどが、大学の非常勤講師や、大学院生といった三、四十代の研究者で占められていて、本文の随所に若手らしいさん新たな見解が見られることである。

更にもう一点つけ加えるとすれば、与謝野鉄幹によつて東京新詩社から「明星」が創刊されたのが明治三十三年（一九〇〇）四月であり、その翌年八月には晶子の『みだれ髪』が出版されたわけだが、それから丁度百年後の二十世紀の終りの年に照準を合せるかのように、実にタイミングよくこの本が出版されたところに意義深いものを感じるのは、私人だけだろうか。

(嵯峨野書院 全五巻シリーズの第一回)

配本 一九九九年十一月 二二〇頁

本体価格二、〇〇〇円)

中川成美・長谷川啓編
『高橋たか子の風景』

村田裕子

高橋たか子を語ることの困難さは、彼女の属性が彼女とその小説を規定してしまふことにある。それは彼女が高橋和巳の妻であり、女性作家であり、クリスチヤンであるということ、彼女とその小説が読む前に既に読み込まれてしまつていくという不幸を意味する。それはまた〈日本近代文学〉という領域で読み込まれてきた無数の作家たちについても同様である。文学という限定された領域においてひとりの作家を分類することで、ひとつひとつの小説と読書という行為の意味はこぼれ落ちて忘れ去られてしまったのではないか。

十人の気鋭の執筆陣による初めての高橋たか子論集である本書は「統一的な批評の視点を定めず、さまざまな読みの可能性をこころみた」ことで、読みの限定

が回避されている。第一部は、高橋たか子の小説世界を多角的に読解し、ジェンダー、小説の形態、宗教などから初めて論じている。水田宗子氏は、母性という言説とその内面に隠された女性の自我を近代の問題として焦点化し、そこから高橋たか子の主人公の悪意や罪、性的快楽の追求の意味を読み解いている。鈴木貞美氏は『ロンリー・ウーマン』を中心に一九七〇年代の女性運動との関連を考察している。第二部は高橋たか子の代表的

な作品が論じられている。増田みず子氏は自ら作家として小説を書くという行為と読書体験とを関わらせながら『空の果てまで』論を展開している。長谷川啓氏は潜在的な「内なる魔」との対峙、あるいは「ジェンダー社会からの逸脱、脱出、越境」という観点から『誘惑者』の読解を試みている。中川成美氏は『装いせよ、わが魂よ』に描かれている「バリという神話的都市」での彷徨を、「小説という形式」を再考させるものとして読み解いて

いる。
このように様々な角度からの読解は、高橋たか子の作品を通して「小説を書く／読む意味の問題」つまり「文学の意味」についての思考へと導く。なぜならそれは、高橋たか子の小説自体が圧倒的な力で小説の多面的な読みをつねに喚起させるからである。
（彩流社 一九九九年一月 二三八頁 本体価格二五〇〇円）

会員の名著・新編著紹介

福田晃・荒木博之編『巫覡・盲僧の伝承世界（第一集）』（一九九九年一月 三弥井書店）

一九九九年一月 三弥井書店

村上美登志編『中世軍記文学選』（一九九九年一月 和泉書院）

木村一信編『戦時下の文学（文学史を読みかえる4）』（二〇〇〇年二月 インパクト出版）

年二月 インパクト出版）

福田晃・岩瀬博・渡辺昭五編『在地伝承の世界・西日本（講座日

本の伝承文学第八巻）』（二〇〇〇年三月 三弥井書店）

小林美和『平家物語の成立』（二〇〇〇年三月 和泉書院）

本号では一九九九年一月から本年四月までに刊行された会員の方々の名著・新編著を紹介いたしました。ただし書評・新刊紹介欄で取り上げたものは省略させていただきました。この期間内で他にご上梓された編著書のごさいます方はぜひご一報下さい。次号で紹介させていただきます。